

## 授業方法について独自に工夫していること 【人文社会科学系】

できるだけ学生が興味を持ってそうな教材を選ぶよう努力している。また、教科書を始めから順番に読み進めるのではなく、面白そうなユニットだけを選んで授業を行っている。

できるだけ学生が興味を持ってそうな教材を選ぶよう努力している。また、授業が単調にならないように、視聴覚教材を使うなどして授業にメリハリをつけている。

授業の資料については、「学びネット」を利用して、事前に配信をしている。ほとんどの授業において、パワーポイントを使っている。時々インターネットを利用した動画、テレビで放送された環境問題関係の映像をDVD化して流したりしている。

自作の動画講義を活用している

この授業の形式は、具体的な事例をVTRで示しながら講義を進めるというものである。毎回、授業の始めに、その回の内容やVTRの見所など、授業の目標を明確に提示する。また、授業の受け方、ノートの取り方、授業と試験の関係など、第1回目の授業をオリエンテーションとして丁寧に説明する。ただVTRを見せるのではなく、いかにノートに内容を定着化させるか、そして、いかに内容を具体的に理解させるかということにもっとも力点を置いている

書作品の制作を通して、感性を高め、創造力を広げていくために、最初に、自らの漢字・ひらがな・カタカナ・アルファベットや縦書き・横書きへの意識と、他者が持つ意識の差異や相関性を探り、文字文化への理解を深めることからはじめた。また、中国や日本の書の古典にみる表現の多様性について、一回ごとにテーマを決めて、いろいろな用筆と表現性の関係についても実技を含めて学習できるようにした。

学生が主体的に参加できるように工夫している。その為には、学生の意思、希望、決定等ができる限り反映できるような活動を授業目標の範囲内で設定している。授業には、海外からのゲストを迎え講演会、談話会なども実施し、学生の興味・関心を高められるようにしている。学生間のピア・フィードバックを取り入れ、教師だけでなく、学生間でも学べるようにしている。多文化リテラシーのプレゼンテーション等では学生自身に評価視点を作らせ、どのようなプレゼンテーションや発表の仕方がよいかを考えさせた。英語コミュニケーションでは、英語を運用することに焦点を当て、教科書を見ているのではなく、電子黒板を利用したヘッドアップラーニングによる口頭コミュニケーション練習に重きを置いた。

指定文献の内容を授業プリントに空所補充の形式で記入させることにより、文献を確実に読むよう促した。

多くの学生は、本講義で取り上げた作品について、これまで親しんできた経験がない。そこで、様々なかたち興味を引けるように工夫した。もともと魅力ある実作品を選ぶのはもちろんであるが、日本語訳の他、ルビを振った訓読や、時にはカタカナでの擬似的な中国語発音を示すことで、内容理解だけではなく、朗読もできる(時には授業中に朗読する)ようにした。また授業で興味を持った場合、今後更に深められるように、図書館所蔵の図書をはじめとして、次に進むための資料を必ず提示するようにした。また、三度のグループワークを通して、中国古典詩文の様々な特徴をとりあげて議論することで、有意義な読解に必要な技術の一端を具体的に身につけられるようにした。

1. 英語によるコミュニケーション能力を高めるために、毎週異なる相手と組んで英語を使うアクティブラーニングの活動を重視した。
2. 課題に真面目に取り組めるように、毎週課題ノートにシールを貼り、そのシール数を評価に反映した。
3. クラス全体での発表会の日には、一人一人が発表するだけでなく、相互評価させた。

学生が海外の事情を自分の事としてとらえられるような、興味を喚起するような授業を心掛けた。今後も学生が意欲的に取り組める環境を提供することで、外国語の学習は単なる知識だけでなく、興味の対象が広がり、言語を理解できるようになることで、他者とのコミュニケーション能力も上がることを今後も授業の中で生徒たちに伝えていきたいと思っている。

DVD教材を使用しました。学生の教科書にはスクリプトが載っていませんので、その理解を助けるため補助プリントを作成し、教科書の演習問題と関連させ書き込めるようにしました。構成や順序等見易い、分かり易いように工夫したつもりですが、学生にとって有益だったどうかは分かりません。

40名を超える大人数のクラスで、しかも、学生間の英語力に違いがあるクラスであっても、ほとんどの学生が満足できるような指導をするように心がけている。ペアワークやグループワーク、グループプレゼンテーションなどを多く取り入れ、授業が単調にならないようにし、皆が英語学習を楽しめるような雰囲気作りをするようにしている。

アクティブ・ラーニングの能動的授業として、グループ発表形式である。能動的および自主性を重視し、初回の授業で自分たちでグループを作り発表日程を決め発表チャプターを選定する。発表形式および発表時間は初回の授業で説明する。基本的にテキストの問題の解答および解説をする。但し、各グループの工夫によりバリエーションは可能である。大学1年で修得した英語力の応用・発展の位置づけとして、英語文章の主題、問題点、論法の分析等を重視した読解法である。発表担当グループに自信を持って発表してもらおうべく、発表前に次の手順を踏む：教授者は解答を渡し解答を確認してもらう。疑問点を教授者に質問し、英語文章の内容を正確に理解する。基本的に教授者は発表を中断させないように配慮するが、必要に応じて適宜補足説明を加える。通常発表後に補足説明およびコメントをする。教授者は、発表の内容(英語文章を正確に理解しているか、説明は適切で分かり易いか等)を評価する。この授業の目標は次の二点である。①自分が理解することと、他の人に理解させることは異なること：人に理解させるにはまず自分が英語文章の内容を十分理解する必要がある、説明の言葉や構成を工夫する必要があることを認識する。②他のグループの発表を聞くことによって、客観的に発表の意義を認識する。

独自に工夫していることは特になし。むしろ、可能な限りオーソドックスな憲法の講義内容を意識し、これに、教員志望の学生が受講していることをごく若干加味するとともに、日本国憲法に限らず基本的な法制度に関する情報提供を行う事を意識した。

資料を多く使用し、かつスライドなど映像資料を多用して資料内容を目で見て確認できるように心がけた。毎回、質問や意見はコメント紙で受け付けた。そして、次の授業で回答した。

異文化についての理解を深めることを目的とするため、ロシア人の国民性など比較的アプローチしやすいテーマから始め、次第に宗教や社会のありようなど「濃い」テーマへと展開していった。授業にあたってはレジュメや映像資料、カタログ資料や音楽など、多角的な観点から理解を深めてもらえるよう、様々なアプローチを試みた。

机間授業を通じて学生との意思疎通を図りながら、個々の質問に丁寧に答えることによって、学生の理解を深めるようきめ細かな授業を行うよう努めている。具体的には、例えば、各自テキストの問題を解いている間、教室を廻りながら、彼らの回答の様子を観察しながら、適宜個別指導をしたり、質問を受けたりすること(机間授業)を常に念頭に置いている。これは学生とのコミュニケーションをとるのに良い方法であり、また個別的にしか質問できない学生もいるからである。また、学生の顔と名前を覚えることも、基本的なことであるが、少人数の語学授業では必須のことである。学生によっては、姓ではなく、名前で呼んだ方が効果的な場合もある。

内容だけではなく関連した事項も解説し学生の興味関心を引き出す工夫を行った。

ともすれば難解な印象を持たれがちな内容を取り上げる方針であったので、講義中心になることを避け、受講者に課題を投げかけては検討させ、それを授業者が解説するという方法を徹底して繰り返した。その際、単独で考えるだけではなく、グループで検討し合うことを取り入れることによって、自身の考え方や発想の仕方を相対化する機会をなるべく多く持たせるようにした。検討結果も、挙手による口頭での説明、ペーパーへの書き込み、グループ単位でまとめ+提出(翌週、評価)など様々なパターンで回答させ、またグループのメンバーを期間内で入れ替える等、授業が平板化してしまわないよう心掛けた。

(1)英語テキストの読解だけでは受講生も退屈するので、映画の脚本をテキストとし、その週読んだ分、実際の映画を観るようにするなどして、多角的な授業を心掛けている。また「裏ワザ流英語」という独自の指導法に基づいた英語発話の指導も行うなど、総合的な英語学習ができるよう工夫している。(2)独自のテキスト『英語の裏ワザ』を用い、ベーシック・イングリッシュの考え方をさらに日本人学習者向けに発展させた指導法を行なっている。(3)3人の講師によるオムニバス授業により、幅広いトピックを元に、アカデミックな考え方、ものの見方を提示し、大学での勉学の導入になるよう、心がけた。

スモールステップで着実に知識が定着するように、復習に力点をおき、毎回前回の授業内容に関する小テストを行っている。また、できるだけオーラル・コミュニケーション能力を高めるため、ペア・ワークを実施した。

経済を扱うので、実感を持ってもらえるように外部講師を招いたり、施設見学に行ったりしている。

メディア制作に関わって、いくつかの情報機器の利用を促した。

学生が意識していない先入観や偏見に気づかせつつ、教員の指導、誘導で学習者の知識もまた大きく影響を受けるということ、実例を見せつつ、体験的に学ばせること

アクティブラーニングを取り入れるために、ペア学習をする時間を多めにとった。その際、できるだけ多く机間巡視を行い、英語でのコミュニケーションを取りやすいように助言を行った。

英文を逐一訳して読むのではなく、限られた情報の中で全体的な内容を予測するようリードすること。

授業内容をより明確化し、履修者が取り組みやすくしていく点に配慮している。

【F英語コミュニケーションI】授業初回に、記述式のアンケートと英作文のミニテスト(成績評価には含めない)を行い、各学生の英語学習の背景や英語学習に対する意識、現時点での英語力などをおおまかに把握して、次回以降の指導の微調整に役立てている。また、毎回の予習を成績評価に含めて、学生の自宅学習を促しつつ、繰り返し効果による授業内容の理解と定着を図っている。さらに、授業内におけるリスニングとスピーキングのアクティビティの割合を半々とし、コミュニケーション能力の育成に必要なインプットとアウトプットの量的・質的なバランスが取れるよう心がけている。

【F英語II】授業初回に、記述式のアンケートと英作文のミニテスト(成績評価には含めない)を行い、各学生の英語学習の背景や英語学習に対する意識、現時点での英語力などをおおまかに把握して、次回以降の指導の微調整に役立てている。また、毎回の予習を成績評価に含めて、学生の自宅学習を促しつつ、繰り返し効果による授業内容の理解と定着を図っている。

学生に考える機会をできるだけ多く持ってもらうことを中心にしているため、講義形式の部分も常に問いかけ(例えば、クイズ形式)→話し合い→発表の形式を取っている。

授業では会話練習を中心とし、文法項目の解説については最低限にとどめた。文法や基本表現を用いた作文練習については毎週1週間で十分にこなせる課題を出し、テキストや教科書を参照しながらその課題をこなしてもらうことで文法や基本表現の習得ができるようにした。

学生参加型にするため、ペアワーク、グループワークなどを推奨し、グループでのプレゼンテーションも実施した。(英コミI)

リーディング主体の授業であるが、学生参加型にするため、ペアワークやグループワークなどを取り入れた。(英語II)

英語コミュニケーションⅠの方は、教材自体は難しくないのですが、新たな語彙やネイティブの使用する表現がたくさん学べるものになっていました。授業の中では、聞く・話す能力の向上に焦点をあて、学生同士が学習した表現を使って行うコミュニケーション活動を毎回入れました。

英語Ⅱの方は、TOEICのスコア向上を目指して、きめ細かい指導に心がけました。どんどん教材を進めるというよりは、少しゆっくりではありましたが、学生の質問に答えながら、文法はもちろん、語彙や表現を例文を挙げてたくさん説明しました。

両方のクラスで、コメントシートを活用しました。今日の授業で学んだこと、質問があれば書いてもらい、翌週の授業でその質問に復習もかねて答えるということをしました。全員の前で手を挙げて質問する学生はなかなかいないのですが、コメントシートにはびっしり学生が毎回、質問を書いてくれました。こちらがきちんとフィードバックしてあげることで、学生の学習に対する意識も向上したように感じました。

メインテキストである映像教材を使用しながら、英語を視聴覚の両面から無理なく習得させるよう努めている。また、学生の学習意欲を高めるために様々な補助教材を取り入れつつ、英語をより身近な存在に感じてもらおうよう常に工夫している。

一方的な授業にならないよう、毎回5、6人の生徒に問題提起してもらい、そこから憲法の議論につなげていく工夫をした。

【L多文化リテラシー】学生の興味のある分野に配慮して授業を進めた。

【L市民リテラシー】コメントシートを配布して、授業内でそれに答えた。

主に理系(数学、理科、養護)および体育の学生から成っていたため、政治や社会の複雑な案件や深い知識を扱うよりは、より広く、かつ一般教養の知識として記憶に残るような授業の進め方を心がけた。